



2025（令和7）年6月30日発行
 （編集）愛光本部
 （TEL）043-484-6391
 （HP）<https://www.rc-aikoh.or.jp/>

5月20日、23日に、昨年度採用された職員の採用後1年面接が行われました。この一年間、メンターから丁寧な指導を受け、先輩職員に相談しながら、風通しのよい環境で楽しく仕事ができているとの感想が多く聞かれました。2年目を迎え、事業所の中であらたに係等の役割をまかされ、まわりの職員に必要な相談をしながら進めていきたいと語る姿は、とてもたのもしく見えました。

□事業経過など（2025.5.1～）

1	木	本部スタッフ会議
2	金	ボランティア委員会
6	火	業務執行会議
7	水	地域食堂委員会
8	木	研修委員会
9	金	実習生指導者会議/メンター委員会
12	月	秋まつり実行委員会
13	火	業務執行会議/防災委員会/感染症対策・衛生委員会
14	水	コ・ヒューマントレーニング/広報委員会
15	木	メンター研修/リスクマネジメント委員会
17	土	声の花束/山王みらいプロジェクト
19	月	佐倉圏域事業部実績会議
20	火	採用1年面談
21	水	地域食堂ともいき
22	木	監事監査(業務)/高齢者福祉事業部実績会議/本部実績会議
23	金	採用1年面談/監事監査(業務)
27	火	業務執行会議/ /コンプライアンス委員会/監事監査(業務会計)
28	水	障害者支援事業部実績会議/地域福祉事業部実績会議/後援会運営委員会/財務プロジェクト
29	木	経営戦略会議

■月報から

□ メイン外出 (ルミエール)

ルミエールでは、これまで「グループ外出」の名称で利用者外出を実施していたが、今年度から「メイン外出」と名称を変更し、スタートした。利用者が主役となって外出し、輝くことを目指すため、担当職員にアイデアを出してもらい、それを実現してもらおうを考えている。家族との関わりを大切にしたい利用者は、兄弟と外出してウナギを食べて過ごし、また、のんびりとした時間を希望する利用者は千葉動物公園でゆっくり1日を過ごす等、それぞれの利用者の想いや希望を形にできれば良いと考えている。無限に広がる利用者の想いを形にする職員の力量が問われており、今年度は最高の思い出をつくることができるよう努めていきたい。

(ルミエール課長 原 宏之)

□ 最後まで食べたいものを (めいわ)

5月末、長期療養型の病棟入院した利用者が退所となった。この利用者の年齢は83歳であり、長い間寝たきりの状態で、全介助にて職員が対応していた。もともと、てんかんがあり、時々発作が起こったり、嚥下機能の低下から誤嚥性肺炎を起こしやすかったりと、気をつけていたことはいろいろあるが、特に食事については特別な対応を行っていた。施設の給食以外にも、市販のものもいろいろ試すが、食べてくれるのは、おやつ類やファミレス系のような味のはっきりした食べ物だった。栄養的な問題はあるが、栄養士や看護師、ご家族とも相談の上、ご本人が好まれる物を食べて過ごしていただくよう判断し、昨年度より給食を中止し、菓子パンやハンバーグなど、ご本人が好みそうなものを毎食用意していた。その甲斐もあり、食事への意欲もうかがえ、一時期落ちた体重も少しずつ回復し、このままめいわでの生活が続くものと考えていた。

そうした経緯の中、4月末、てんかん発作を起こし救急搬送、入院となった。検査により尿路感染と肺炎が見つかり、脳のCT検査では、脳のほとんどを水分が占めており、身体機能低下が進行していることが分かった。入院中の治療により、てんかん、尿路感染、肺炎は改善したが、嚥下機能の低下が著しく口腔からの食事は不可能との医師の判断があり、ご家族も入院のまま最期を迎えることを希望された。

入院当日、医師から検査結果について説明を受けたあと、ご本人が口から食事をとれていたこと、前日のイベントではケンタッキービスケットを食べていたことを伝えると、今の状態がよく食べられていたと驚いていた。今思えば、ご本人は体力の限界まで、食べたいものを食べることができて幸せだったのではないかと思う。そして、そこまで寄り添い、支え続けてくれた職員に心から感謝したい。

(めいわ課長 中田 憲一郎)

□ 障害者施設の在り方検討会が発足される（福祉新聞より）（リホープ）

厚生労働省は5月26日、「障害者の地域生活支援も踏まえた障害者支援施設の在り方に係る検討会」を立ち上げ、地域移行を推進するため、障害者支援施設の役割や機能などについて議論を開始した。第8期障害福祉計画（2027～29年度）の基本指針の見直し議論が秋ごろに始まることを見据えて検討を進め、年度末までに報告書をまとめる。次期障害報酬改定も視野に入れる。

昨年度の施設調査では、地域移行について全入所者を対象に取り組んでいる施設は18%であった。一方、地域移行に取り組んでいない施設は36%であり、理由は「地域に居住の場（グループホーム）が少ない」「地域移行をした際に見守りなどを行うネットワークが不十分である」といった回答が多く挙げられたが、「入所者にとって施設が一番適切であり、地域移行は不要である」との回答も一定数あった。

厚労省は施設の役割や機能を議論するにあたり、居室形態や小規模化、日中活動、重度化・高齢化への対応、強度行動障害など専門的支援といった論点を示し、障害福祉計画で定める目標の基本的方向性についても議論していく。検討会が発足されたということは、令和6年12月の月報に記載したことが動き出していることを意味している。

今後、入所施設の在り方、存在意義を問い直し、そのためには我々は何をしなければいけないのか。「意思決定支援」、意思表示が難しい方は「利用者の最善の利益 または 意思及び選好」を推察し、地域移行も含め、できる限り本人が望む暮らしを実現できるように努力することに他ならない。

（リホープ副施設長 麻生 知明）

□ 防犯対策（山王の家）

皆が寝静まっている午前1時過ぎ、インターフォンが鳴り、宿直職員も驚きながら応答した。知らない人が20分程数回インターフォンを鳴らし「中に入れて欲しい」と訴えが続いた。職員から「入れることは出来ない」と伝え、各所に電話で応援を頼んでいる間に居なくなっていた、との事だった。開所以降初めての事だったが、こういう時の動きの想定は全くしておらず、翌日の職員会議で改めて状況の確認と対策を話し合った。対応として、

①22時以降はインターフォンが鳴り（モニターで）確認しても対応はしない

②居座られた時は警察に連絡し対応を依頼する…事を確認した。また夜間の警備体制等、アルソックの対応範囲の確認をしていくことにした。

幸い、寝静まった時間であったため利用者が気づくことはなかった。この一件後1か月以上経過し、現時点で再び夜間のインターフォンが鳴る事はないが、防犯対策についてマニュアルやハード面でも適切な対策を講じていこうと思う。

（山王の家管理者 岡本 綾子）

□ 草花に興味ありますか（ワークショップかぶらぎ）

かぶらぎでは開所当初から、1階スペースに生花を活けている。地域の花屋から2週に1回届けてもらっていたが、昨年、花屋の都合により一時休止となった。これまで当たり前であった生花が無くなった空間は、一気に色を失ったように思えた。

特に声をかけたわけではないが、ほどなくしてスタッフや利用者がそれぞれ、自宅や道端に咲く草花を持ち寄ってくれるようになった。花がなくてもかぶらぎの事業運営や利用者の動きに大きな影響はない。しかし、「色を失ったカフェ」が少し寂しいと感じていた人が、他にもいたのだなと思った。

時には持ち込まれた野草についていた虫がカフェを舞うようなこともあったが、かぶらぎに少しでも色や潤いを届けたいと思い行動してくれたことに頭が下がる。

5月に入り、しばらくぶりに花屋から生花が届くようになった。そして、思わぬ副産物として、この休止期間を通して植物に関心があると思われる人たちがつながりはじめた。彼らはカフェの中には花が届くようになったので、今度はかぶらぎから見える外の庭の手入れをして、草花を育てていくことができないかと話している。「仲間と一緒に草花を育てる」ことで、新たな役割を得る利用者も出てくるだろう。そんな小さな役割が人を支えたり、元気にしたりする。そんな展開にも期待している。

(ワークショップかぶらぎ主任 宮部 和樹)

□ 食材業者の変更、評価 (ジョーの家)

以前の業者の食品価格は、朝食 230 円、夕食 450 円であったが、3 月より少し価格が安い現業者へ変更した。現業者は、朝食 150 円、昼食 380 円、夕食 370 円という価格である。昼食と夕食の価格差が小さいため、メニューのバリエーションを見ながら夕食には昼食、夕食両方のメニューを見て選択し、提供している。入居者からは、魚メニューが増えたことや、ヘルシーメニューでありながらボリュームがある点が好評である。食事を作る世話人からも、「包丁いらず」なほど事前カットされた食材が多く、4 人分ぴったりであるため、調理の手間が省けると話があった。今回の業者変更は、入居者にとって「食の楽しみが増えた」と、「食材費の負担軽減」という大きなメリットをもたらした。前業者は調味料が用意されていたが、現業者はホームで用意するメニューもある。世話人にとっては味付けの調整という課題はあるものの、食材の事前カットにより業務負担が軽減された。しばらくは、様子を見ていきたい。

(ジョーの家 高橋 健)

□ 佐倉圏域のグループホーム (よもぎの園)

今年度、佐倉圏域内に愛光のグループホームを開設することになっている。現在、グループホーム建設中であるが近況報告をする。新しいグループホームはよもぎの園から約 400 ㎡離れた場所に建設中である。定員 10 名の木造 2 階建てである。3 月に地鎮祭をおこなってから基礎工事を経て、現在は上棟も済み、建物の全景が分かるほどになってきている。完成は夏ごろを予定しており、今から待ち遠しい。併せて入居希望調査を実施しており、今後、面談を進めていきたい。

(佐倉市よもぎの園主任 近藤 真一)

□ ワゴン車のリフト部分の車輪破損 (はちす苑)

デイサービスの送迎車出発時にリフト部分の車輪が破損していることに気が付いた。リフトの上げ下げはできるのだが、車輪部分が破損して一部なくなっていることで動きが悪くなっていた。念のため、他のリフト付きワゴン車の同じ部分を目視で確認したところ、車輪部分に亀裂が入っている箇所があることが判明した。すぐに業者に依頼して、部品交換を行ったため大事には至らなかったのが幸いである。改めて送迎マニュアルを見直し、車両点検の項目にリフトの車輪点検を追加した。対応してくれた修理業者は、リフト車等の福祉車両の取り扱い研修を行っている方であった。はちす苑では、日頃の安全確認のため、研修を依頼することとした。

(はちす苑苑長 安部 一義)

□ ケアマネのつどい ～ヤングケアラーについて考えよう～（南部包括支援センター）

9日、南部圏域のケアマネジャーの集い、「南部エリアの集い」を実施した。テーマは「ヤングケアラー」。実際のケースをもとに事例検討および勉強会を行った。

令和2年度に実施された「ヤングケアラーの実態に関する調査研究」によれば、世話をしている家族が「いる」と回答したのは小学6年生で6.5%、中学2年生で5.7%、全日制高校2年生で4.1%、大学3年生で6.2%という結果であった。ヤングケアラーは、家庭内のデリケートな問題であることなどから表面化しにくいといわれており、当事者自身が問題だと感じていない場合も多い。そのため、福祉、介護、医療、学校など、関係機関におけるヤングケアラーに関する研修や、地方自治体での現状把握が十分でない状況にあるといわれている。

「学生のような若者が、親や祖父母の介護をすることの何が悪いのか」「ヤングケアラーの支援はケアマネの業務範囲外だ」という考えもあり、支援しなかったからといって責任を問われるものでもない。

しかし、将来ある子ども達の一生に一度きりしかない大切な時間が奪われるような事は避けるべきである。今回参加したケアマネジャーからは、「実体験を聞くことでヤングケアラーの方の気持ちを知ることができた」「相談窓口を知れたのはよかった」という意見が多数寄せられた。

今、ケアマネジャーに求められていることは、ヤングケアラーへの関心を示し、早期発見、早期解決の方法と一緒に考え、専門機関と連携していくことではないかと思われる。今回、南部圏域のケアマネジャーと情報共有できたこと、ヤングケアラーについて考える機会を作れたことは有意義な時間であった。

（南部地域包括支援センター管理者 森 由美子）

□ 南部地域福祉センターA棟が休所（南部地域福祉センター）

南部地域福祉センターのA棟は、冷房の故障と佐倉市の公共施設の再配置計画により、令和7年5月末をもって休所となった。現在、佐倉市の多くの公共施設で再配置計画が進行中であることもあり、今後の方向は未定であるため、地域の方々にもその都度説明を行っている。

センターの動きとして、今までA棟で利用していた多くの教室、団体、一般の方々に対し、6月からの貸館の部屋の使い方、予約の仕方、付随する備品の使用方法などを説明している。「南部地域福祉センターA棟」の歴史は40年以上と長く、その間、多くの市民が、入浴をはじめ、教養教室への参加や趣味の部屋として利用してきたとのことである。それぞれに思い出があり、休所を惜しむ声が止まない。

（南部地域福祉センター 青山 秀人）

□ 芋苗植え（佐倉市南部児童センター）

毎年恒例の春の芋苗植えが、今年も開催された。今回も、まちづくり協議会の皆さんの協力により、さつまいもの苗と落花生の種を植える体験が実現した。参加者は幼児と保護者、スマイルクラブの子どもたちとその家族など、総勢70名を超えた。3年前は参加者が集まるか不安もあったが、「野菜を好きになってほしい」といった声も多く、食育への関心の高さがうかがえ、年々申込みは増加している。当日は、畑がすでに耕され、マルチが張られ、区画分けまで整えられていた。毎回ながら、丁寧に準備してくれるまち協の皆さんには感謝しかない。植え方の説明を真剣に聞く保護者や小学生の姿に感心するとともに安心した。小さな子どもたちは土や虫と遊ぶ姿も見られたが、それもまた楽しい体験である。さて、今年はどうなお芋が

採れるだろうか。参加した子どもたちは、きっとおいしいお芋を掘り当てるに違いない。秋の収穫が楽しみである。

(南部児童センターインストラクター 吉田 知加子)

□人間関係 (学童保育所)

友達関係でもめたり悩んだりしている場面を見ることがある。一人の子がグループを仕切っていて、理不尽なルールを押し付けるなどし、泣いてしまうこともある。そっとそばで見ていると「それはおかしいよ」「その理由を教えて」など、以前は中々思うように気持ちを伝えられなかった子も、少しずつ意見を言えるようになってきている。意見を戦わせた後、「でも〇〇ちゃんはいつもみんなのために〇〇してくれることあるよね」などとフォローもかかさないうえに感心した。その後は皆、けろっと何もなかったように遊び始めていた。このように人間関係を学んでいくのだと感じた

(学童保育所主任 齋藤 理江)